

本音の コラム



鎌田 慧
かまた さとし

石丸小四郎さんは、四十年も前から、「双葉地方原発反対同盟」のメンバーである。連続爆発事故のあとは、富岡町から秋田市へ避難し、いまはいわき市で不自由な生活をされている。

原発に反対であっても賛成であっても、いったん事故が起きれば、みなおなじ運命になる。だから危険性に気づいた者が行動するしかない。

石丸さんは事故前から、被曝労働者の救済活動をつづけ、白血病で死亡した四十七歳の三度下請け労働者の労災認定を勝ち取っている。いわき市に移住したのは、七十歳すぎてなお、運動を継続するためだ。

外国人労働者の出現

その活動の成果として、「廃炉収束作業に外国人労働者」(ほんげんぱつ新聞)一月二十日)の記事を書いている。日系ブラジル人向け新聞に、福島原発の求人広告があらわれた。「日当3万円、一日2時間」の好条件。廃炉収束作業の労働者供給基地になっている、広野町のJヴィレッジでは、すでにホールボディーカウンター棟の行列に外国人らしい姿があらわれている、という。

廃炉作業や除染作業の労働者は、すでに不足気味だ。従事者の被曝線量がふえるにしたがい、ますます足りなくなる。技術研修・実習などの名目で、外国人労働者が集められそうだ。「原発輸出」がその大義名分になりかねない。かつての「公害工場」輸出どころではない。(ルポライター)